



書 評

臨床麻酔薬理学書

日本麻酔科医会連合出版部・編

編集主幹：森田 潔（岡山大学名誉教授/川崎医科大学特任教授）

今回紹介する「臨床麻酔薬理学書」は日本麻酔科医会連合出版部が事業活動の一つとして出版部を設けて発刊する書籍の第一号である。本書の編集委員によって先に発刊された「臨床麻酔科学書」の内容をさらに掘り下げた内容となっている。

意識がある患者を、薬剤を利用して、意図的かつ一時的に手術実施が可能な状態に陥らせ、その間の全身状態を精緻に管理することを日常的に実践する医師、すなわち麻酔科医師が、正確な薬物動態学、薬力学の知識と実践経験を持って患者に向かうことは、麻酔科医のアイデンティティそのものである。

1950年、日米医学教育者協議会の来日講演で、近代医学が日本にもたらされたが、その一員として、筋弛緩薬を使用した全身麻酔を紹介した Dr. Saklad は、“麻酔は臨床生理であり、臨床薬理である”と言い、麻酔は単なる手技であるとの考えであった当時の外科医を驚かせたという。第1章の冒頭にある“臨床麻酔とは「臨床薬理学/臨床麻酔薬理学を実践する臨床医学」である”との記述はまさにこの精神を受け継いだ正統な書籍であることを裏付ける。

本書では、第一部を薬理学総論として、薬物動態学・薬力学に関する考え方を、実際に臨床で使用する薬剤やモニタリングを例に挙げつつ、わかりやすく記述している。また、第二部では各論として、麻酔科医師が手術麻酔・集中治療・ペイン・緩和領域で実際に使用する薬物、すなわち全身麻酔の三要素に影響する薬剤（吸入・静脈麻酔薬、オピオイド、その他の鎮痛薬、筋弛緩薬、局所麻酔薬）に加えて、循環作動薬、抗不整脈薬、

利尿薬、抗凝固薬、ステロイド、制吐薬、産科麻酔領域で子宮収縮・弛緩に使用する薬剤、マグネシウム製剤、消毒薬を取り上げ、それぞれについて総論で基本的な薬理メカニズムの解説、各論で個別の薬剤について述べている。現在の臨床麻酔に関わる薬剤をここまで網羅している成書は本書をおいてほかにない。編集主幹の森田潔先生、編集委員の川真田樹人先生、齋藤繁先生、佐和貞治先生、廣田和美先生、溝渕知司先生の慧眼に深く敬服する。

本文ではエビデンスを意識した記述が徹底されており、文献も最新のものが取り入れられている。薬物の添付文書では得てしてわかりにくい薬効薬理を、本書では図などを用いてわかりやすく記述することが意識されている。

本書の内容は、麻酔科専門研修以上の医師であれば読みやすく、通読して麻酔薬理学の知識を整理することに適しているが、索引も充実しており、使用頻度の低い薬物を使用するときに参照して、効果メカニズムを理解する際に大変重宝する構成である。

麻酔科専門医を目指す若い麻酔科医師だけでなく、ベテランの麻酔科医にとってもハンディに手にとれる場所に常備しておくことをお勧めしたい。

（東京大学大学院医学系研究科生体管理医学講座
麻酔科学 内田 寛治）

B5判, 392頁

2023年12月, 定価14,300円

中山書店

